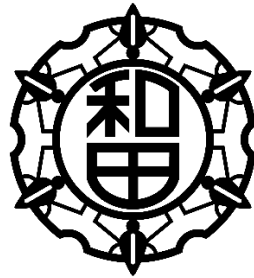


令和4年度

学 校 評 価
及 び
学 校 関 係 者 評 価



令和5年1月
浜松市立和田小学校

I 「知」知育向上プラン

1 児童の実態

昨年度末の教育課程において、本校の児童の実態を以下のように捉えた。

- 与えられた課題に一生懸命取り組むことができる。
- 友達の考えを共感的に受け止めることができる。
- ▲ 学習や活動への取り組みは受け身な児童が多い。
- ▲ 目標や課題に対して向上心をもって粘り強く取り組むことが苦手。
- ▲ 自分の考えや思いを表現することに課題がある。

2 今年度の取り組み

(1) 授業改善の推進

本校の目指す子供像である「学びあう子」の具体である「課題を見つけ、自分の考えをもつ子」「考えを発表し合い、話し合うことで深め合う子」「ねばり強く学習に取り組み、達成感を感じ、自分を高める子」を具現化するために、本校児童の実態より、まずは、主体的に学ぶ児童を育てる必要があると考えた。そこで、研修テーマを「分かる喜び、学ぶ楽しさを実感できる子の育成」と定め、目標達成のための手立てとして、ICT機器の活用とキャリア教育を2本の柱として、「やればできる」「やってみたらできた、分かった」という経験を積み重ねていくことにした。また、自分の考えや思いを整理したり友達に伝えたりする場を設けることで、本校児童の課題を解決していくことにした。一人一回の公開授業に向けて、ICTの部、キャリアの部の部別での事前研修、参観、事後研修を行い、授業改善に努めた。

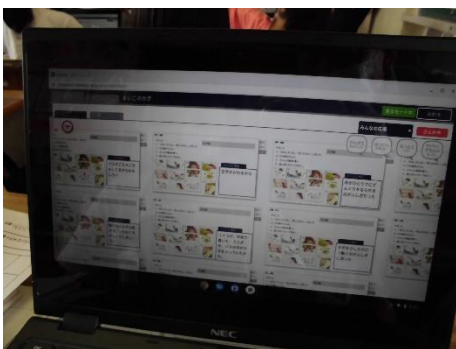
手立て1 学習内容に合ったICTを活用し、効果を検証する。

効果的に学習する手立てとして、ICTを活用し、効果と課題を検証した。

- ・ICTを活用した学習が有効と考えられる単元の学習計画を立てた。
- ・Formsを使用して、学習に入る前に、児童の実態調査を行い、学習計画に生かした。
- ・オクリンクやムーブノートを使用し、自分の意見や考えをまとめさせた。
- ・オクリンクやムーブノートを使用し、自分の考えと友達の考えを比較させた。
- ・オクリンクを使用して、学習のまとめを行い、発表させた。
- ・Jamboardを使用して、グループ活動を行ったり、複数人で意見をまとめたりさせた。
- ・Googleスライドを使用し、共同編集で考えをまとめさせた。
- ・ドキュメントやスプレッドシートを使用して、新聞やパンフレットを作成させた。
- ・カメラやムービーの機能を使用して、外国語や体育、音楽などの動画を撮り、客観的に自分の姿やできを確認させた。
- ・カメラ機能を使用して、植物の生長を記録したり、制作物の振り返りを行ったりした。
- ・ドキュメントを使用し、係表を作成させた。
- ・MIMを使用し、特殊音節の練習を行ったりした。
- ・ドリルパークを使用して、練習問題を実施し、基礎基本の定着を図った。
- ・アプリを使用して、タイピング練習、ローマ字練習、プログラミング学習を行ったりした。

〔成果と課題〕

- 子供たちがタブレット端末に慣れ、より効率的に ICT を活用できるようになった。
- 意見をまとめたり、友達の意見と比較したりすることが容易になった。
- グループの共同作業を同時進行で行うことができるようになった。
- 自分の姿や出来栄を客観的に確認できるようになった。
- 反復練習などの個別最適な学びが可能となり、基礎基本が定着した。
- 各学年でどのような ICT 活用をしたかを共有することで、どの学年でどのツールが活用できるかを系統立ててまとめることができた。
- ▲低学年では、できることが限られてしまい、活用できるツールが少なかった。
- ▲タイピングに慣れない学年では、付箋に書いたほうが早い活動もあり、どのツールをどの学年で活用するかを見極める必要がある。
- ▲ツールの使用方法に留意点が必要なものがあり、教員が把握した上での指導が必要。



手立て2 キャリアでつけたい力を明確にし、学びを未来へつなげていく。

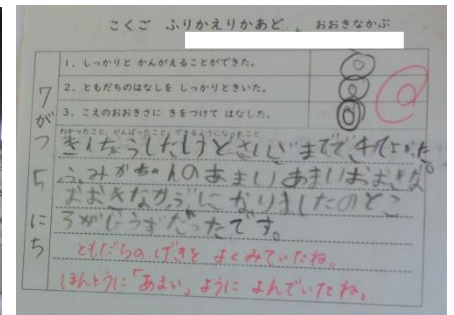
研究授業を行う際に、キャリアの年間計画の中から、キャリアで育てたい力がつく教科・単元を選び、より効果的にキャリアの力をつけるための指導方法を研修した。

- ・キャリアオリエンテーションを実施し、各学年のつけたい力を子供たちと共有した。
- ・教材研究の際に、キャリア教育の4つの力の中で、特に重視したいものを明確にしてから、指導案作成を行った。
- ・今やっている学習でどんな力がつくのかを子供たちが認識できるように、4つの力について視覚的に分かるキャリアプレート黒板を提示した。
- ・子供たちが認識できるように、ワークシートにもキャリアシールを貼った。
- ・友達の考えや作品のよさを認めて、自分の学習に取り入れる場を設定した。
- ・振り返りカードを活用した。
- ・自分がどれだけ分かったのかを把握させるために、振り返りの文型を提示した。
- ・振り返りの内容として、学習に対する手段、方法、時間を考えさせた。
- ・振り返りを継続することで習慣化し、自ら次の目標を立てることにつなげた。
- ・授業の終わりに「学びを未来につなぐ一言」を教師が話し、1時間の学びが未来につながっていることを意識させた。



【成果と課題】

- キャリアオリエンテーションの時間を設けることで、キャリアの4つの力を主体的に考え、自分ごととして捉えることができた。
- 単元計画にキャリアで付けたい力を明記することで、子供たちと共通理解することができた。
- キャリアプレートを活用することで、子供たちが付けたい力を意識して学習に取り組むことができた。
- 振り返りを重ねることで、子供たちの学びを把握し、必要な支援を行うことができた。
- ▲「学びを未来につなぐ一言」が子供たちに響いているか確認ができなかった。
- ▲キャリアの視点での振り返りが不十分だった。



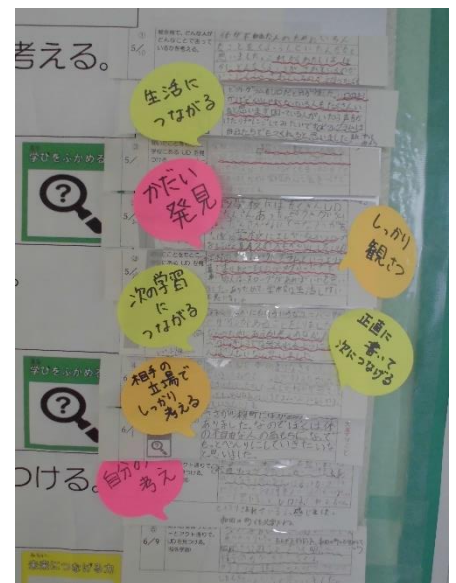
(2) 発達支援教育の充実

① 授業UD（ユニバーサルデザイン）の導入

誰もが学習しやすい環境づくりや、抵抗なく学習に取り組むことのできる手立てを、発達支援コーディネーターより紹介してもらう機会を校内研修として設けた。そして、各学級で以下のような実践を行った。

<学習しやすい環境づくり>

- ・教室全面に余分な物は貼らず、視覚的にすっきりさせる。
- ・机に出すものを確認し、すっきりした机上で学習できるようにする。
- ・学習計画や前時までの学習について視覚的に分かるものを掲示する。



<授業中の手立て>

- ・授業をパターン化し、学習の流れを把握して取り組むことができるようにする。
- ・めあてを書き、本時の学習を焦点化する。
- ・問題文を印刷し、ノートに書く量を減らす。
- ・スモールステップで学習を進めていく。
- ・視覚的に理解を促す図や写真を板書に使用する。
- ・実際に作業して思考や理解を深めるための具体物を用意する。
- ・ヒントカードを用意し、必要に応じて活用できるようにする。



- ・ヘルプカードを用意し、自分で質問できない子が助けを求められるようにする。
- ・ペアやグループ学習を取り入れ、考えを確認・共有する機会を設ける。
- ・発表や振り返りの話型・文型を示す。

③ あんず教室との連携

通級指導教室である「あんず1・2」、発達支援教室である「あんず3」と連携を図り、個別の支援を必要としている児童に、個に合った指導を行った。

- ・あんずファイルを通して、あんず教室での指導内容を担任、保護者と共有した。また、コメント欄を用いてあんず教室、学級、家庭での様子への共通理解を深め、指導に生かした。
- ・「あんず参観週間」を設けることで、学級担任があんず教室での指導を参観し、各児童の実態を把握したり、個に合った支援の仕方を知ったりした。



(3) 浜松市計算力調査の結果

- ・日時 令和4年4月15日(金)
- ・対象 2～6年生
- ・教科 算数

	2年	3年	4年	5年	6年
平均正答率(市)	94.9	91.8	82.1	78.3	84.0
本校の状況	上回る	ほぼ同じ	ほぼ同じ	ほぼ同じ	上回る

〔考察〕

基本的な計算はよくできている子が多い。しかし、四則の混合した計算や繰り下がりや繰り上がりのある計算、約分を必要とする計算での間違いが多い。

また、大きな数の概念の習得や十進位取り記数法の基礎的理解を必要とする問題理解が不十分だと考えられる。さらに、言葉や式で考えを示しながら筋道を立てて解いていく問題も、文章理解、算数用語の理解、計算の意味、必要な情報の使い方などに難がある。

授業の中で、四則混合の計算などの練習や、問題文を読み、聞かれていることを明確にすること、四則の意味(何を使って計算するとよいのか)、算数用語の定着、見通しのもち方などの理解を図っていきたい。

(4) 全国学力調査の結果

- ・日時 令和4年4月19日(金)
- ・対象 6年生
- ・教科 国語・算数・理科

	全国	浜松市	和田小学校の状況
国語	65.6	67	全国平均より、かなり上回る
算数	63.2	64	全国平均より、上回る
理科	63.3	62	全国平均と、同程度

〔考察〕

① 国語

解答傾向は、問題による多少の差異はあるが、国や市とほぼ同様であった。
無答率も、国や市に比べ、低い問題が多い。

- 「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、正答率が高い。
- 「話すこと・聞くこと」の正答率が高い。
- ▲ 問題の意図を理解して、適切に表現することの正答率が低い。

② 算数

解答傾向は、問題による多少の差異はあるが、国や市とほぼ同様である。
無答率は低いが、国や市と同様な傾向がみられる。

- 「数と計算」「データの活用」領域は、比較的正答率が高い。
- ▲ 「変化と関係」領域の正答率が低い。

③ 理科

解答傾向は、問題による多少の差異はあるが、国や市とほぼ同様である。
無答率は、国・算に比べると高く、国や市と同様な傾向がみられる。

- 「生命」を柱にする領域は、比較するとやや正答率が高い。
- ▲ 実験や観察の結果を通して、自分の考えをもったり表現したりすることの正答率が低い。

3 来年度の取り組み（改善点）

（1）校内研修を通して

- ・「主体的・対話的で深い学び」となる学習を展開するために、教科横断的なカリキュラムマネジメントを行い、児童の実態を踏まえた単元構想を工夫する。
- ・教師の「指導と評価の一体化」を大切にした授業を行うために、学習指導要領で単元（題材）で育成を目指す資質・能力を確認し、子供の発達段階や特性を踏まえて児童の実態を丁寧に捉えた上で、単元（題材）の目標を設定する。
- ・基礎基本の定着を図るために、ノート指導の方法や宿題の出し方、指導法などを話し合う機会を設ける。

（2）授業・日々の活動の中で

- ・基礎基本の定着を図るために、授業の規律を見直し、学習習慣も定着させる。
- ・個別最適な学びと協働的な学びを充実させるために、学習の目的に合わせて ICT を活用する。
- ・児童の「見通しと振り返り」を大切にした授業を推進するために、学習計画を提示したり、1時間の終わりや単元の終末に振り返りを行う時間を設けたりする。
- ・キャリア教育を推進していくために、キャリア教育の年間計画を確認し、4つの力を計画的に育成していく。
- ・文章問題の出題の意図を正しく理解して立式したり、的確に答えたりする力を身に付けるための指導をする。
- ・スモールステップや学習のパターン化で「やればできる」「できた」が実感できる授業を行う。

Ⅱ「徳」徳育向上プラン 「認め合う子」の育成のために

1 心の教育を推進する道徳教育・特別活動

(1) 昨年度の実態

道徳教育・特別活動に関する学校評価アンケート（12月実施）の結果

Q4	生活や学習の中で、チャレンジし頑張っていることがある。		
児童	88.0%	保護者	87.4%
Q5	ぼく／わたしは、友達に優しくすることができる。		
児童	93.9%	保護者	97.5%
Q6	ぼく／わたしは、進んで挨拶をすることができる。		
児童	82.7%	保護者	82.5%
Q8	ぼく／わたしは、健康や安全に気を付けて、生活している。		
児童	95.1%	保護者	92.2%
Q10	やるべきこと（係活動、宿題、明日の支度など）を進んでできる。		
児童	89.9%	保護者	73.3%

- 児童の多くが友達と協力して学習したり仲良く遊んだりすることができる。困っている友達に進んで声を掛けて助けることもできる。
- 多くの子が、自分から進んで挨拶をしたり、相手の名前を呼んで挨拶をしたりできる。
 - ▲ 相手のことを考えずに行動してもめることがある。
 - ▲ 個人差が大きく、校内と校外の差も大きい。
 - ▲ 外遊びや掃除の移動などで、廊下や階段を走る子が多い。
 - ▲ 自分の行動について、児童自身の評価と保護者の評価の差が大きい。

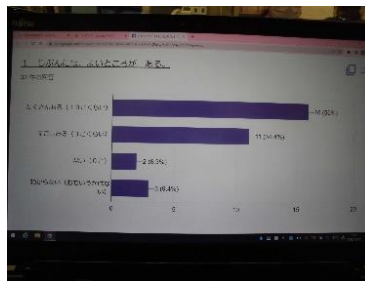
(2) 今年度の取り組み

① 心の教育を推進するために

本校の目指す子供像である「認め合う子」の具体として「自他を知り、自分らしさについて考え、自分と他者の違いを受け入れる子」「互いのよさを見つけ、自分に自信をもち、他者を励ます子」「互いを思い合い、自分の判断で正しい行動をする子」としている。その具現化のために、主体的な学び、対話的な学びを重視した道徳教育の充実を図り、自分事として考えたり、物事を多面的にとらえる力や正しく判断する力を育成したりすることに努めた。また、異学年交流を通して、自他の違いを知るとともに、互いを思い合い、互いの良さを認め合う姿を目指した。

手立て1 道徳科の授業の充実

- ・ 導入時に事前のアンケートを紹介して問題意識をもたせたり、自身の経験を想起できるように写真を提示したりして自分事として考えられるようにした。



- ・子供主体の話し合いができるように少人数のグループを構成し、ホワイトボードを活用してそれぞれの意見を可視化した。



手立て2 「いつでも、どこでも、だれにでも」できる挨拶指導

形式的な挨拶にとどまることなく、相手を意識した挨拶ができるよう、生活委員会が、1年生のために学校職員の写真と名前をかいた掲示を各教室に作った。また、校内と校外（旗振り）の挨拶の様子に差があることに気づき、改善していくためにPTAの方々にインタビューして全校に放送し、どのような挨拶が気持ちの良いものなのか考える機会とした。



- ・門や昇降口で職員が挨拶をして児童を迎えたり、廊下で会った時に名前を呼んで挨拶したりした。



② 他者との関わり方を学ぶ機会「心の日」の設定

月に1回「心の日」を設定し、児童の心の安定と成長を促すための取り組みをし、心が温かく、そして優しい気持ちになるような話を聞いたり、自分の心を見つめたりした。また、構成的グループカウンターのショートエクササイズなどを取り入れ、自己理解や他者理解を進めたり、自己肯定感を高めたりすることを目標とした活動を行った。

手立て1 一人一人のよさや、価値観の多様性を認める方法

発達コーディネーターから全教師が「出会いのエクササイズ」の研修を受け、学級開きに活用した。

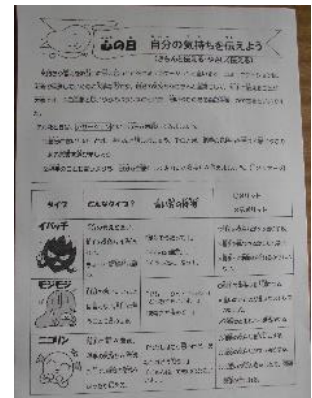
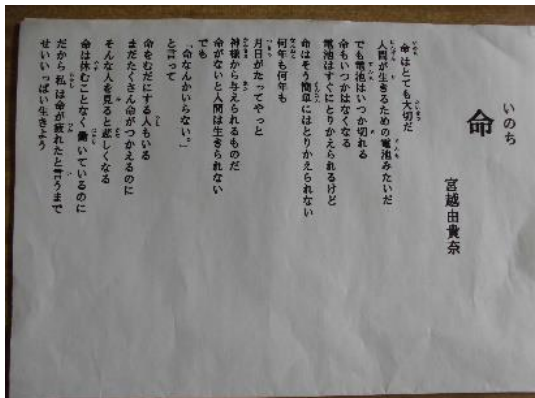


「他者理解のエクササイズ」では、グループで協力して絵しりとりをしたり、自分が選択したものをペアで紹介したりするゲームを行った。

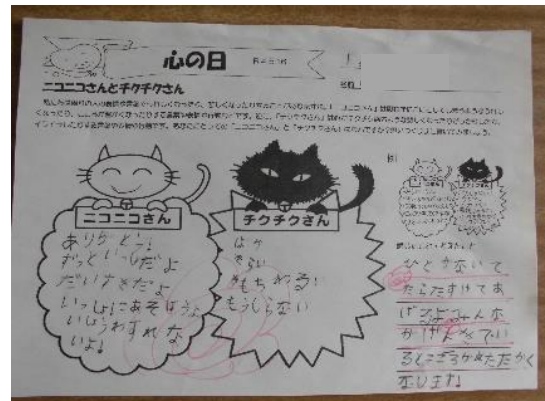


手立て2 「心の日」と関連を図った継続的な指導

「心の日」の取り組みに価値づけをし、話し合いの時間を設けたり、関連した教材を扱ったりした。



学級に「心の日」の掲示コーナーを設置し、いつもフィードバックできるようにした。



③ 異学年集団による活動

手立て1 縦割り活動

1年生から6年生までが混在する縦割り班を編成し、清掃を中心に活動した。高学年にとっては、低学年に対する思いやりを育てる場となり、低学年にとっては、身近に手本があることでより良い活動の仕方を学ぶ機会となった。



手立て2 ペア学年による異学年交流

最上級生である6年生が1年生とペアを組み、年間を通して交流している。1年生を迎える会では6年生が中心となって会の運営を行った。ペアでの顔合わせをきっかけに関わりを深め、朝の支度を手伝ったり、校内を一緒に見回ったりした。その後も、休み時間に遊んだり互いの教室を行き来したりして交流している。3学期の6年生を送る会は、こういった関わりや、その中で見られた6年生の思いやりへの感謝を伝える機会としたい。



2年生は主に生活科の時間に1年生と交流した。1学期には2年生が和田小の先輩として、校内を案内した。2学期には、生活科で制作した動くおもちゃを1年生に披露した。体育館を会場にお店を開き、1年生がそのおもちゃを使って楽しんだ。



手立て3 委員会活動を通じた異学年交流

感染症予防の観点から、全校での交流は難しいものがあつたが、それぞれの委員会を中心に異学年交流を行った。計画実行委員会では、笑顔・明るさ・思いやりなどにつながる活動を「スマハロポスト」と題して募集し、投函された児童の良さを掲示したり、放送で紹介したりした。図書委員会や保健委員会では、仕事体験と題して下級生と交流した。自然栽培委員会では、栽培した花を全校に配付し、思いやりの輪を広げた。



(3) 現在の児童の姿

道徳教育・特別活動に関する学校評価アンケート（12月実施）の結果

Q4 生活や学習の中で、チャレンジし頑張っていることがある。

児童 91.6%(+3.5%) 保護者 回答項目なし

Q5 ぼく／わたしは、友達に優しくすることができる。

児童 94.1%(+0.5%) 保護者 97.5%(±0%)

Q6 ぼく／わたしは、進んで挨拶をすることができる。

児童 88.5%(+5.8%) 保護者 75.4% (-7.1%)

Q8 ぼく／わたしは、健康や安全に気を付けて、生活している。

児童 94.7%(+0.4%) 保護者 91.4% (-0.8%)

Q10 やるべきこと（係活動、宿題、明日の支度など）を進んでできる。

児童 91.7%(+0.8%) 保護者 65.4% (-7.8%)

(4) 成果と課題

- 事前アンケートや生活の場面の写真を活用したことで、自分事として考えることができるようになってきた。
- 心の日の掲示を設けたことで、授業中や生活の様々な場面の中で、想起させることができるようになった。
- 話し合い活動では、自分と他者では考え方が違うという前提に立って話し合いを進めることができた。心の日の活動と合わせて、他者理解の基盤できてきている。
- 挨拶については、校内で進んで行ったり、相手の名前を呼んで挨拶したりする習慣が身に付いてきた。
- ▲ 挨拶ややるべきことなどについて、児童の自己評価は高いが、家庭や地域の中では実践できていない。

2 生徒指導の充実

(1) 昨年度の実態

① 令和3年度の学校評価アンケート結果（12月実施）の結果

Q1	ぼく／わたしは、楽しく元気に学校に通っている。	
	児童 93.2%	保護者 94.4%
Q11	先生は、ぼく／わたしのよいところをほめている。	
	児童 90.9%	保護者 90.3%
Q12	ぼく／わたしのクラスは楽しく、教室は安心できる場所である。	
	児童 88.7%	保護者 92.7%
Q13	先生は、学習や生活などについて、相談しやすい。	
	児童 91.0%	保護者 90.8%

- 学級の約9割は学校や学級が楽しく感じており、安定した学級運営が行われている。
- ▲ 約1割の児童は不安や心配を抱えている。4項目の数値が近いことから、教師との接触機会がすくなくなっていることが影響していると考えられる。

② 令和3年度のいじめ・不登校の実態

- ・ 市教育委員会へのいじめ報告件数 … 4件
- ・ 30日以上欠席している不登校児童数 … 9名
- ・ 校外適応指導教室へ通級している児童数 … 3名

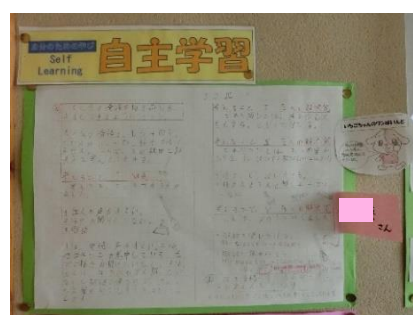
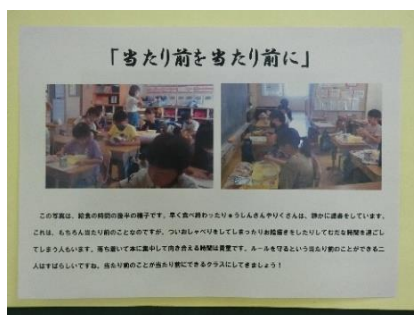
(2) 今年度の取り組み

① ほめて伸ばす指導

本校の目指す子供像「認めあう子」を実現するためには、まず教師自身が児童一人一人の良さを見つけ、それを認めていく必要があると考えた。教師の働きかけをきっかけとして、児童自身が自分の良さに気づくとともに、他者の良さを知る機会とする。そのような活動を積み重ねていくことを通して、学級の雰囲気をもっと良いものとし、児童自身が互いの良さに気づき、認めあう姿を育てていくことを目指した。

手立て1 一人一人の行いの価値づけ

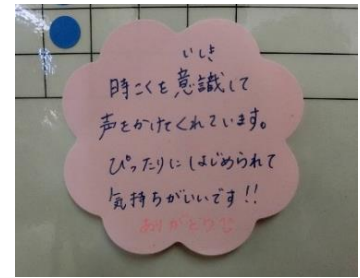
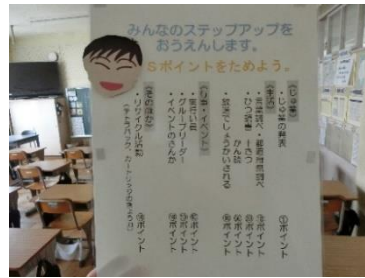
教育活動の中で見られる児童の良い行動を教師の話や掲示物で称揚した。その際に意識したことは、「だれの・どの行動に・どんな価値があったか」を「本人が自覚し、学級全体が理解できる」ということである。行動をただほめるだけでなく、一人の良い行動が集団に与える影響や、その行動の意味について教師が価値づけることで、具



体的にその良さを認識できるようにした。また、月一回程度行われている生徒指導委員会の中で、それぞれの学級で行われている取り組みを職員間で共有し、自分の学級に生かすようにした。

手立て2 集団としての雰囲気づくり

一人一人の行いを価値づけ、互いの良さを認めあうことと並行し、集団としての雰囲気づくりを行った。係活動や学習面での頑張りなど、当たり前になっている子をほめることで、集団の雰囲気が温かいものとなるようにした。手立て1と同様に、この場合も価値づけを大切にすることで、集団として成長している感覚をもたせるようにした。



② 気持ちに寄り添う相談・指導

児童・保護者からの相談内容は、学習や友人関係だけでなく、家庭環境や子育て、発達支援に関わることなど、多様化かつ複雑化している。こういった様々な相談のニーズに応えるため、定期的な相談の機会を確保するとともに、日常的な相談に対しても、職員の中で分担を決めて対応に当たった。

手立て1 定期的な相談機会の確保

- ・ 夏季・冬季教育相談 … 年2回（冬季は希望制）
- ・ いじめの早期発見のための「すこやかアンケート」 … 年3回
- ・ スクールカウンセラーによる希望相談 … 年16回
- ・ すこやかポストの設置 … 常時

手立て2 日常的な相談への対応

- ・ 学習や学級内の友人関係など … 学級担任
- ・ 他学級の児童や他学年との関わり … 学年主任
- ・ 健康面をはじめ、学級では話しにくい相談 … 養護教諭
- ・ 発達面の相談や、他者との関わり方について … 発達支援コーディネーター
- ・ 問題行動や、行動面の心配について … 生徒指導主任
- ・ いじめの疑いやいじめ対応 … いじめ対策コーディネーター
- ・ 行政機関や医療機関などの社会福祉 … スクールソーシャルワーカー(SSW)
- ・ 児童心理や子育てについての相談 … スクールカウンセラー(SC)

SSWには社会福祉の専門家として、保護者の相談にのってもらうとともに、行政や医療等の各種外部機関との調整をしてもらっている。SCには心理の専門家の立場から、保護者の相談にのってもらっている。また、職員に対しても助言をもらっている。

(3) 今年度のいじめ・不登校の実態（2学期末時点）

- ・ 市教育委員会へのいじめ報告件数 … 42件（昨年度比+37件）
- ・ 30日以上欠席している不登校児童数 … 6名（ // -3名）
- ・ 校外適応指導教室へ通級している児童数 … 3名（ // ±0名）

いじめ報告件数が大幅に増えた要因として、児童・保護者・教職員のいじめに対する認識の変化がある。以下にいじめ防止対策推進法にあるいじめの定義を示す。

「いじめ」を「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義する。

これまで、一般的な観念として、いじめは「1対多の構図」、「立場の上下がある」、「複数回行われている」、「意図的な行為」などという捉え方をされてきた。しかし、いじめ防止対策推進法の定義によれば、人数や力関係、回数や行為の意図などに関わりなく、被害者が心身の苦痛を感じるものとしている。

本校でも、浜松市の「いじめ防止等のための基本的な方針」の改訂を受け、本校でもいじめの定義とその認識を改めることとした。校内いじめ対策委員会の中で、教職員内のいじめに対する認識や、組織的な対応について研修を行った。

また、保護者に対しても、いじめ発見のためのアンケート「すこやかアンケート」を配付した際に、上記の定義を明示した。これらの要因から、いじめの認知件数が増加したと考えられる。

具体的なケースとして、「休み時間に友達から嫌なことを言われた。」「遊びの中で押されて嫌な気持ちになった。」などがある。その行為が一回だけであったとしても被害者が心身の苦痛を感じていればいじめとして認知をする。また、行為の意図を条件に含めないため、良かれと思って言ったり行ったりしたことについても、相手が苦痛を感じていればいじめとして認知している。

結果として、認知件数は昨年度より急増しているものの、校内において、いわゆる学級崩壊のような様子が見られたり、これまでの一般的な観念としてのいじめが頻発していたりするわけではない。むしろ、このような細かな認知と早期対応をしていくことで、いじめ重大事態を防ぐことへとつなげていくことを狙いとしている。

加えて、細かな認知と早期対応をしていくためには、組織的な対応が不可欠である。そのため、校内のいじめ対応についての流れを整理し、職員一人一人がそれぞれの役割を果たすことで問題解決へと向かえるようにした。**（別添資料参照）**

本校における「いじめ防止等のための基本的な方針」についても、昨年度3月末に一部改訂をしたが、市の方針改訂を受け、現在改訂作業中である。

(4) 成果と課題

① 令和4年度の学校評価アンケート結果（12月実施）の結果

Q1	ぼく／わたしは、楽しく元気に学校に通っている。	
	児童 95.2%(+2.0%)	保護者 94.1%(-0.3%)
Q11	先生は、ぼく／わたしのよいところをほめている。	
	児童 92.8%(+1.9%)	保護者 90.1%(-0.2%)
Q12	ぼく／わたしのクラスは楽しく、教室は安心できる場所である。	
	児童 90.9%(+2.2%)	保護者 90.1%(-2.6%)
Q15	先生は、こまったことがあると、お話をきいてくれる。	
	児童 91.0%(±0%)	保護者 88.2%(-2.6%)

- 一人一人の行動を価値づけることで、認められている意識をもつ児童が増えた。
- 学級の雰囲気づくりの結果、楽しく、安心できる場所と感じる児童が増えた。
- 結果として、学校が楽しく元気に通える場所と感じている割合も増加した。
- ▲ 保護者の結果は全体的に昨年度より低下している。
- ▲ 教室が安心できる場所ではない、先生はこまったときに話を聞いてくれないと感じている保護者の割合が増えている。

3 来年度に向けての改善点

(1) 道徳教育・特別活動

- ・ 道徳の授業が、より実生活に返っていくものになるような課題の設定や発問の工夫。
- ・ 挨拶の意義や対象、その効果について、児童が具体的に理解するための手立て。
- ・ 生活委員会を中心に、今年度の取り組みをベースにしながら、低学年だけでなく高学年も進んで挨拶ができるようにするための指導。
- ・ 心の日の活動の意味や、その日の活動の目的を児童に理解させるための工夫。
- ・ 係活動や委員会活動など、自分の頑張りが形になるような振り返りや価値づけ。
- ・ 次の日が楽しみになるように日々の授業を充実させることで、宿題や身支度への意欲をもたせる。
- ・ 縦割りグループの活用。
- ・ 集団の単位を工夫した異学年交流。

(2) 生徒指導

- ・ いじめ防止のための基本的な方針の改訂
- ・ いじめの早期発見、早期解決に向けた年間での指導計画策定
- ・ 早期発見のための、アンケートの頻度や実施時期の工夫。
- ・ 一人一人の良さを価値づけ、集団へと返していく方法の工夫。
- ・ 相談の機会を逃さないようにするための日々の声掛けの工夫。

Ⅲ 「体」体育・安全向上プラン

1 昨年度からの課題と成果

(1) 体力向上の取り組み

- △ コロナ禍により、全体的に子供たちの体力が低下している傾向にある。
- △ 外遊びの種類が限定されており、同一の運動ばかりを行い、運動経験に不足があること。
- △ 自分の姿を振り返ることができておらず、できたと思って、自分の演技・競技を高めようとしないうこと。

(2) 保健指導

- 「ぴかぴかチェック」、「生活リズムチェック」、「アウトメディアの日」を通して、子供たちが自分で健康に過ごそうとする考えが見られたこと。

(3) 食育指導

- 毎月の給食の献立を栄養価別に出すことで、自分の食べているものがどのように自分の食事にいきているのかが分かった。
- ホワイトボードを活用することで食材の栄養素に注目するようになった。

(4) 安全教育

- 防災訓練、防犯訓練を通して、子供たちの危険に対する意識は高まった。
- △ 実際の登下校の様子を見ていると、自分の行動が危険につながっていることに結びついていない。

2 今年度の取り組み

(1) 体力向上に向けての取り組み

① 教科体育

○運動の楽しさを味わい、さらに挑戦したいと思える授業

運動をしていて楽しいと思える瞬間は、自分がその運動ができたと思える時である。「できた」と思える瞬間は子ども一人一人にとって様々である。シュートがうまく入った時や、前転がきれいにできた。その技術を生かして作戦が成功したと思える時であったり、更なる発展技に取り組んでみようと思える時であったりする。その「できた」と思える瞬間に効果的な指導ができるよう以下の点を重点として指導した。

【重点項目】

- ・ 技能の高まりを実感し、進んで運動に取り組む意欲を育むための学習カードの活用。
- ・ 持久力を高めるために、体育の授業の中での持久走の実施。
- ・ 多種多様な運動領域における補助運動の追加。
- ・ 技能の高まりを感じるためのICT機器の活用。

② 体育的行事

○校内運動会の実施

新型コロナウイルス感染症防止の措置をとったうえで、全校で行う意義を考え、午前



中で全校開催をした。また、子供たちを中心に据えた行事にするために、次のような取り組みをした。

- ・ 各学年から、開閉会式でがんばりたいこととがんばったことの発表者を選出し、活躍の機会を作った。
- ・ 1, 3, 5年生と2, 4, 6年生の2部制とし、6年生が演技をしている際には、5年生中心で活動に取り組めるようにした。

また、感染症対策を十分に取り、安心して観戦できるように次の取り組みを行った。

- ・ 観客席を分散するために、各学年の演技・競技の向きを南北に分けて披露した。

○新体力テストの実施

児童一人ひとりが自らの体力・運動能力を知るために、新体力テストを実施した。



③ 教科外体育

○運動委員会主催のイベント

運動委員会が考えた遊びや運動を全校に紹介することで多様な運動に取り組めるように企画した。ただ、多くの企画が新型コロナウイルスの関係でうまく実施ができなかった。そこで、3学期に個人で取り組めるなわとびカードを委員会で作成し、配付していると考えている。

○ドッジボールコートの特設設置

運動委員会の常時活動として、毎朝、運動場にドッジボールコートのラインを引いた。子供たちが遊べる場を意図的に作ることで、外に出て遊びたい、運動したいという気持ちを持たせ、運動に親しむことができるようにした。



◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（体力向上）

<新体力テストの結果>

※ 水色がついている種目は、昨年度の浜松市の平均を下回っていて課題となる種目
 桃色がついている種目は、浜松市の平均よりもすぐれていた種目

<男子>

学年		握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20mシャ トルラン	50m走	立ち 幅とび	ボール 投げ
1年	R3 全国	9.73	12.62	27.28	28.79	19.37	11.31	116.08	8.76
	R3 浜松市	9.34	12.62	26.20	27.86	22.13	11.36	116.73	8.75
	R4 和田小	8.4	13.1	22.5	24.8	19.5	11.3	117.4	7.6
2年	R3 全国	11.12	14.16	28.91	32.50	29.91	10.65	128.87	11.79
	R3 浜松市	10.89	14.35	28.05	31.51	29.12	10.66	125.68	11.68
	R4 和田小	10.7	14.8	29.7	31.2	27.6	10.6	128.7	12.6
3年	R3 全国	13.06	16.21	29.98	36.12	37.03	9.95	138.60	15.79
	R3 浜松市	12.63	15.70	29.67	34.49	33.01	10.15	134.62	14.71
	R4 和田小	12.6	16.3	31.6	33.9	32.3	10	143.4	14.9
4年	R3 全国	14.89	18.26	32.26	39.81	45.42	9.61	148.84	19.83
	R3 浜松市	14.42	17.80	31.63	38.84	41.09	9.70	143.35	18.08
	R4 和田小	14.1	18.3	29.2	39.8	39.5	9.7	143.4	19.5
5年	R3 全国	17.48	20.75	34.09	44.40	53.60	9.15	156.87	23.12
	R3 浜松市	16.80	20.04	34.76	42.07	48.26	9.38	152.39	21.11
	和田小	16.2	18.6	31.2	39.2	39	9.4	152.2	21
6年	R3 全国	20.42	21.38	36.02	45.87	56.54	8.91	166.85	26.61
	R3 浜松市	19.89	21.18	36.67	45.51	56.32	8.88	165.35	24.01
	R4 和田小	20	21.3	37.7	43.6	54.2	8.8	168.4	26.4

<女子>

学年		握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20mシャ トルラン	50m走	立ち 幅とび	ボール 投げ
1年	R3 全国	9.15	12.5	28.75	27.3	17.12	11.74	107.81	5.79
	R3 浜松市	8.82	12.17	28.66	27.3	18.62	11.69	110.26	5.97
	R4 和田小	8.8	13.6	27.8	26.4	17.4	11.9	115.1	6.4
2年	R3 全国	10.47	13.65	31.42	30.53	22.91	11.06	121.75	7.67
	R3 浜松市	10.49	14.08	31.08	30.55	23.01	10.95	118.7	7.92
	R4 和田小	9.4	13.8	33	28.7	19	11.2	111.7	7.8
3年	R3 全国	12.37	15.62	33.95	34.85	31.02	10.28	129.89	9.84
	R3 浜松市	12.12	15.28	33.43	33.46	26.41	10.45	128.63	9.78
	R4 和田小	11.3	15.8	33.9	31.5	22.6	10.6	133.7	8.8
4年	R3 全国	14.5	17.98	36.13	38.43	36.64	9.85	143.71	12.4
	R3 浜松市	14.13	16.9	35.7	37.44	33.06	10	137.65	12.13
	R4 和田小	13.6	16.8	34.5	38.8	33.3	10.1	135.4	11.4
5年	R3 全国	17.35	19.2	39.88	42.8	41.89	9.47	149.2	14.21
	R3 浜松市	16.56	18.42	39.02	40.98	39.31	9.59	145.24	14.06
	和田小	16.5	18.6	37	38.1	36.8	9.7	146	12.1
6年	R3 全国	19.86	19.67	40.55	44.05	46.49	9.17	158.1	16.55
	R3 浜松市	19.5	19.36	41.67	42.87	44.34	9.24	153.8	15.91
	R4 和田小	19.2	19.5	41.2	41.7	47.2	9	160.2	15.4

(2) 保健指導

① 「ぴかぴかチェック」による衛生管理指導

月2回、朝の会に実施することで、身の回りを清潔にするための意識付けをした。結果は昼の放送で保健委員会が全校に伝えた。

② 「生活リズムチェック」による生活習慣指導

保健週間を通して生活リズムをチェックした。自己の生活習慣を客観的にみることで、生活リズムの改善を促すことができるようにした。

③ 「アウトメディアの日」によるメディアコントロール

心の日の中でメディアコントロールについて考えた。また、家庭にめあてや取り組みを書いた紙を持ち帰らせることで、家庭でもメディアに対する考えてもらう機会とした。

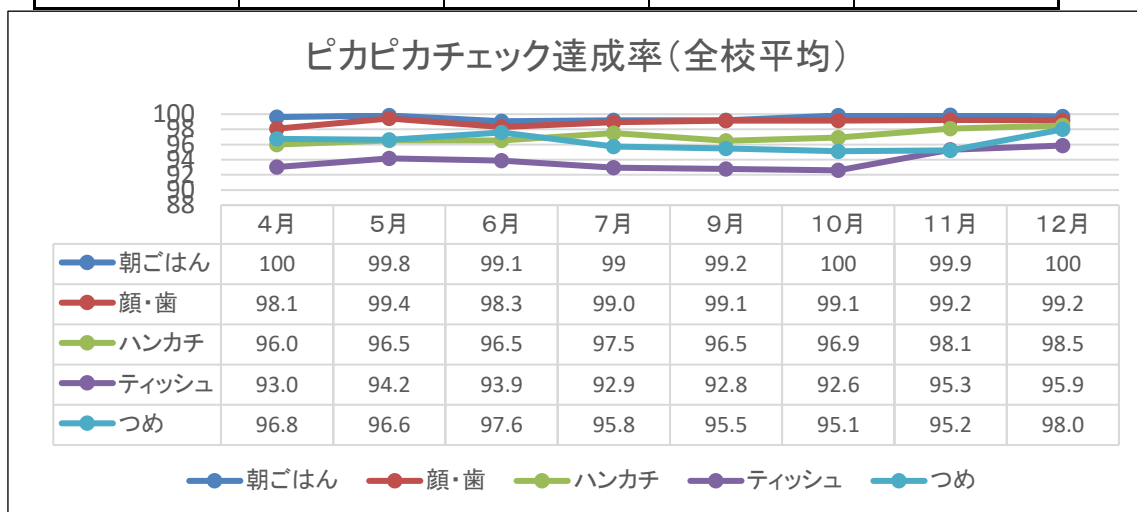


◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（自己の生活習慣）

〔ぴかぴかチェックの集計結果〕

(%)

朝ごはん	顔・歯	ハンカチ	ティッシュ	つめ
99.5	98.9	97.1	93.8	96.3



<考察>

朝ごはんが100%達成された日は、16回中2回であった。すべての項目で100%達成されたクラスが毎回5学級程度ある。特に、2学期後半に増えてきた。半分以上の学級が、100%達成できたこともある。すべての結果についてよくできていた。担任や児童保健係の声掛けの成果である。

<生活リズムチェックの集計結果>

(9/26~9/30) 保健週間調べ

	決めた時刻までに寝る	決めた時刻までに起きる	朝御飯を食べる	洗顔・歯磨きをする	外遊びや運動をする
1年	88.4	92.4	98.5	78.2	84.3
2年	77.2	88.6	98.4	95.4	75.4
3年	75.6	87.7	98.3	95.3	79.5
4年	79.9	86.5	99.8	97.2	82.6
5年	80.3	87.9	99.2	99.8	72.4
6年	80.4	87.0	97.3	97.1	78.4
全校	80.3	88.3	98.6	93.8	78.7

<考察>

意欲的に取り組もうとする子とそうでない子の差が顕著に出る。また、高学年は目標とする就寝時刻が遅くなる傾向にある。外遊びや運動をすることに関しては、コロナ禍であるために、なかなか外に出られない現状があることが分かった。

<アウトメディアの日について>

6年生のある学級の実態
○誰とチャレンジする？
⑦家族で16% ⑧親子で20% ⑨子供だけで60%
○チャレンジするコースは？ (重複有)
A) 1日テレビ・ゲーム・ネットに触れない。 0人
B) 学校から帰ったらテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 2人
C) () 時以降はテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 9人
D) 食事の時はテレビ・ゲーム・ネットに触れない。 14人
E) テレビ・ゲーム・ネットに触れる時間を決める。(1日 分まで) 10人
○生み出された時間をどう使う？
家族とふれあう・読書・お手伝い・勉強・運動・早めに寝る

めあての達成率(12月) **86.0%**
寝た時刻の平均 **9時44分**

<考察>

家庭で決めたルールを守ろうと頑張っている姿が見られた。日ごろから、自分で気を付けられるようになるように指導を進めていきたい。

<疾病異常の治療率について>

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全校
視力	66.7	90.9	73.3	72.0	81.8	67.4	73.6
歯科	47.8	84.6	65.5	48.0	60.7	53.6	59.5
眼科	66.7	100	100	-	100	50.0	78.5
耳鼻科	100	-	-	50.0	-	-	79.4
内科	100	100	100	100	100	100	100

<考察>

夏休み前の面談で、未受診の子には担任から声をかけている。ただ、歯科の治療率が低い数値となっている。

(3) 食育指導

① 給食の献立を活用した食に関する指導

- 献立の内容を放送や学級の掲示で紹介したり、給食室前のホワイトボードに掲示したりすることで、自分が食べているものが体を作っているもととなっていることを知ることができるようにした。
- ふるさと給食週間や学校給食週間など、地域の食材や行事食の紹介をすることで、食に興味をもてるようにした。



② 各学年の実態に応じた5分間指導

- 朝活動の時間に栄養教諭が各学級を訪問し、学年の学習内容や発達段階に応じた食に関する指導を実施した。
・1年、ひまわり学級「給食室の中を見よう」

- ・ 2年「給食に出てくる旬の食べもの」
- ・ 3年「すがたを変えるお米」
- ・ 4年「かんで食べるとなんでいいの」
- ・ 5年「だしで味わう和食の日」
- ・ 6年「成長期とカルシウム」

③ 朝食調べを活用した実態把握

- 朝食調べを行うことで、朝食の摂取状況を把握した。また、5年生において「朝ごはん食べていますか？」のリーフレットを活用して自分自身の朝食のとり方を振り返る機会を設けた。

◎ 今年度の取り組みに対する結果と考察（食育指導）

<朝食調べ結果>

学校のある日	食べた	551人	97.9%
	食べなかった	12人	2.1%
学校のない日	食べた	526人	93.8%
	食べなかった	35人	6.2%
1週間のうちのどのくらい朝食を食べるか	毎日食べる	498人	88.8%
	食べる日のほうが多い	53人	9.4%
	食べない日のほうが多い	7人	1.2%
	ほとんど食べない	3人	0.5%

<考察>

朝食について、平日に朝食喫食率は高く、朝食摂取の習慣が身につけていると考えられる。一方、休日は平日と比べ低い数値となっている。望ましい生活習慣を身につけるためにも、朝食の大切さとあわせて、休日の朝食摂取についても継続して指導していく必要がある。

(4) 安全教育

① 防災・安全指導への取り組み

- 年間4回の避難訓練を通して、安全な避難の仕方を身に付けることができるようにした。
 - ・ 1回目・・ 災害時の基本的な避難経路を指導し、避難経路を確認する。
 - ・ 2回目・・ 地震が発生した後の2次被害（浸水）を想定した高所への避難。
 - ・ 3回目・・ 児童への予告なしで地震の発生を告知し、避難する訓練。
 - ・ 4回目・・ 放送を聞き、様々な場所にいた時の避難の仕方を考える。
- 年度当初に引き渡し訓練を実施し、家族で家までの経路を確認する時間を作った。
- 月に1回、朝活動の時間に「安全の日」を設定し、交通・防災・生活の観点から、生活場面の写真を提示したり、ワークシートを用いたりして指導した。
- 各学年の実態に合わせて防災講座を実施した。
 - ・ 1, 2年「防災ダッグ」
 - ・ 3, 4年「災害時判断ゲーム（クロスロード）」
 - ・ 5年「家庭内DIG訓練」
 - ・ 6年「DIG訓練」
- 年に1度、実際に起こりうる犯罪の事例等を必要に応じて紹介することで、防犯意識の向上を図り、判断力を養う。

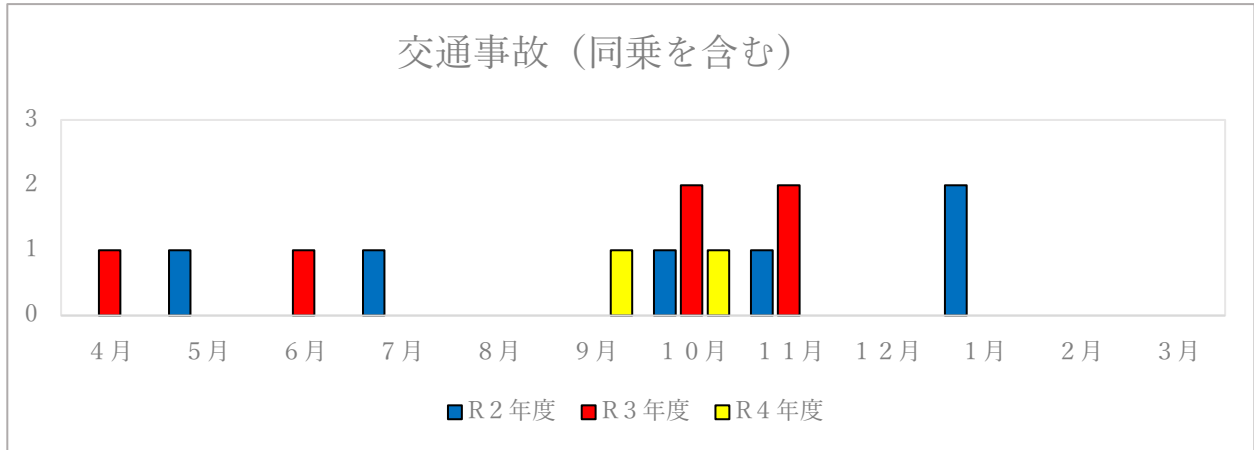
◎ 今年度の取り組みに対する考察（安全教育）

① 避難訓練の実施（考察）

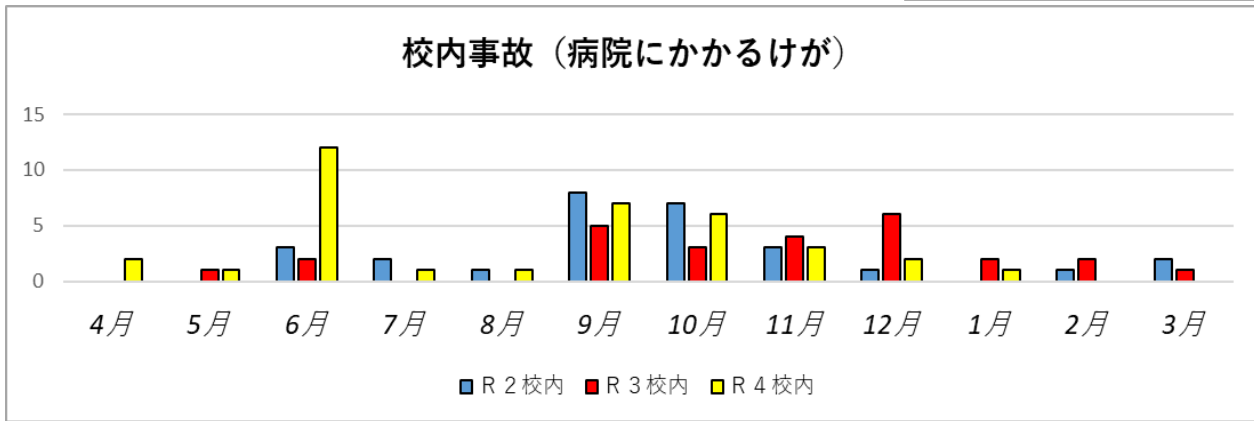
1回目から3回目までの避難訓練を実際に行う事で、災害発生時の安全行動のとり方や、避難経路の確認ができた。4回目については、座学での学習となった。自分がどこにいても身を守れるように、さまざまな場所を想定して対応方法を考えた。主体的な判断ができるようになった。

② 交通、防犯教室の実施（結果と考察）

<校内事故・交通事故（過去3年間の比較）>



R2年度	6件
R3年度	6件
R4年度	2件



R2年度	28件	コロナ禍以前は毎年70件以上のけががあった。
R3年度	26件	密を避け、落ち着いた生活を心掛けていること。
R4年度	36件	活発な活動ができていないことの現れかと思われる。

<考察>

交通安全に関する指導、防犯に関する指導では、交通の日を設定し放送やプレゼンテーションを用いて交通安全を呼び掛ける機会を増やした。登下校の様子を見せたり、実際に地域の方から連絡を受けた課題について考えさせたりすることで、危険を防ぐ登下校や遊び方について学ぶことができた。その成果もあってか交通事故は減少したが、危険な登下校の様子は依然として見られるため、より児童が主体となって受けられる指導を考える必要がある。

防犯教室でも、写真から不審者への対応や自ら危険な場所に行かないようにする判断力を育むことができた。ただ、少なからず交通事故が起きている現状から、より児童が主体となって受けられる指導を考える必要がある。

◎『体育・安全向上プラン』に関わる学校評価アンケートの結果

Q7 遊びや運動で体力づくりに取り組んでいるか。

児童 83.5% 保護者 78.2%

Q8 健康や安全に気を付けて生活しているか。

児童 94.9% 保護者 91.4%

Q9 「早寝早起き朝ご飯」の習慣がついたか。

児童 86.0% 保護者 79.6%

<考察>

アンケート結果から、外遊びの量があまり増えていないことが分かる。また、コロナ禍により外で遊ぶことができない子と、運動をしている子の差がさらに広がっている傾向が見られた。

安全については、保護者、児童ともに高い数値となっている。また、交通事故も0件ということで一見安全なようにも思える。ただ、日頃の子供たちの様子を見ていると本当に危険のない登下校をしていたのか疑問が残る。日々の指導で安全について呼び掛けるとともに、家庭と連携しながら指導していきたい。

3 来年度の取り組み（改善点）

（1）体力向上に向けての取り組み

子供たちにとって運動の機会が少なくなっているようには思えない。むしろ、習い事や地域クラブ等で活躍している話を聞くと、多くの時間運動をしているように思う。ただ、運動の領域について偏りがあるように感じられる。一つの運動だけに特化することも大事だが、幅広い運動経験を積ませることも学校の役割だと感じる。しかし、学校の体育の時間の中でとなると、時間も限られる。そこで、今年度活動しようとした運動紹介を学期ごと一つに絞り、発信する。そして幅広く奨励することで子供たちのやる気につなげていきたい。また、今年度同様に、各運動の補助運動を取り入れながら体育の授業を行っていきたいと考える。

（2）保健指導

今年度に引き続き、「ぴかぴかチェック」、「生活リズムチェック」、「アウトメディアの日」を行うことで、生活習慣を見直したり、身の回りを清潔にしたりする意識付けをし、自ら健康であろうとする気持ちをもてるように指導していく。

（3）食育指導

ホワイトボードへの食品掲示や栄養素が分かる献立の配付など、今年度同様に食品に対して興味関心をもてるようにしていく。また、栄養教諭の教室巡回指導も今年度と同様に取り組むことで、より栄養の知識を持てるようにしていきたい。

（4）安全指導

今年度の取り組みを継続し、安全に努められるようにする。さらに、児童の危機意識を高め、どんな場所でも自ら考え安全に過ごせるような声掛けや指導をしていきたい。

IV 信頼される学校づくり

1 今年度の取り組みとその考察

(1) 情報発信

Q15. 学校は、たよりやホームページなどで情報をよく発信している。

保護者 1学期：94.2% 2学期：94.4% (+0.2%)

学校の教育活動を多くの方に知っていただくために、毎月、学校だより「ふれあい」、学年だより、保健だよりなどを発行し、必要な情報を発信している。学校だよりは、さくら連絡網を活用し、WEBでの文書配信を進めている。

日々の活動の様子を紹介するブログも、一日1投稿を目指し、令和4年度は、2学期終了時まで約280件の記事を掲載している。



(2) 家庭・地域との連携

Q12. 学校は学習がよくわかるように教えたり、手助けしてくれたりする。

保護者 1学期：82.8% 2学期：83.6% (+0.8%)

Q14. 学校は、学習や生活について、相談しやすい。

保護者 1学期：84.3% 2学期：88.2% (+3.9%)

Q16. 学校は、保護者や地域と連携して、教育課題に取り組んでいる。

保護者 1学期：84.8% 2学期：83.8% (-1.0%)

保護者に対しては、各種たよりやさくら連絡網、ブログなどを通して、教育活動の様子を伝えたり、周知をはかったりお願いをしたりした。

コロナ禍において、十分に学校の教育活動を見ていただくことはできなかったが、5月と9月には、地域を分けて分散方式で参観会を開催することができた。運動会も開催方法を検討した上で、全校一斉で開催し、多くの保護者に参観していただくことができた。

保護者との面談、教育相談の機会は、4月のリモート面談、1学期末の教育相談（全家庭対象）、2学期末の教育相談（希望制）と当初の計画通り、定期的に行うことができた。

学校アンケートでは、学校での学習の様子や教育相談に係る内容については、学校を対象とする他の質問内容に比べ、やや低い回答傾向であった。また、感染症対策の緩和が進む中で、学校行事やイベントの再開や拡大、緩和を望む意見も多くいただいた。

コロナ禍において、登校を見合わせたり、自宅待機をしたりする児童に対して、学習内容の確認や学力補充のために、タブレットを活用して、その日の学習内容の連絡に努めてきた。



今年度からコミュニティ・スクール制度を導入し、学校運営協議会が発足した。学校支援コーディネーターの助力をいただき、学校運営に対して、地域からボランティアを募った。これまでの、読み聞かせ、図書館補助、学校花壇に加え、家庭科でのミシン実習の際の学習ボランティアをお願いした。教師一人では十分な支援や見届けができないところ、実習への補助をいただき、児童の学習内容の理解につながった。

また、地域企業や公的機関の協力をいただき、校外学習や講話、講座といった形で、学習内容を深化補充する機会を多く設定、実施することができた。



(3) 感染症対策

Q14. 学校は、健康や安全に気を配っているか。

保護者 1学期：93.6% 2学期：95.1% (+1.5%)

本年度も新型コロナウイルス感染症予防に努めてきた。日々の健康チェック、体温測定や消毒の実施など、密接、密集、密着を避ける取り組みを実施した。

式や朝会は、オンラインでの配信を活用することで、全校への発信をすることができた。

参観会や運動会など、保護者が来校する機会では、時間や場所を分散して指定し、3密をできるかぎり避ける方法で実施した。保護者にも御理解いただき、大きな問題はなく、行事や活動を進めることができた。



(4) ICTの有効的な活用

教員の働き方改革が課題とされているが、ICTを活用することでの作業の軽減、効率化を進めていっている。

昨年度は、紙媒体で行っていたアンケートを児童一人一人にタブレットが配付されたことにより、タブレットに配信し回答することとした。本年度は、保護者対象のアンケートもさくら連絡網のアンケート機能を利用し実施したことにより、集約、解析作業が軽減された。



また、グーグルクラスルームを利用して、職員会議や研修などを進めてきた。一堂に会さなくても、密を避けながら、内容伝達や検討、資料の共有などが図れた。

(5) 学校教育活動の特色

本校の前身である和田尋常小学校の卒業生である、高柳健次郎氏の「世の為、人の為になる研究を」という思いを引き継ぎ、平成14年以来、発明くふうコンクール・コンテストに取り組み、本校の特色の一つとなっている。

現在は、「浜松市小中学生発明くふうコンテスト」(主催：浜松経済クラブ)と称し、夏季休業中の課題として3年生以上が取り組んでいる。本年度は、13名が入賞し、「学校賞」も受賞した。



<主な受賞内容>

第3回浜松市小中学生発明くふうコンテスト

浜松市長賞、浜松商工会 女性会会長賞、発明研究会奨励賞、優秀賞 (7名)

第70回静岡県学生児童発明くふう展

静岡県知事賞、静岡新聞社・静岡放送賞、入選 (2名)

(6) 生活習慣について … 学校生活アンケートより

Q9. ぼく／わたしは、「早寝早起き朝ご飯」の習慣がついている。

2学期 児童：85.9% 保護者：79.6%

Q10. ぼく／わたしは、やるべきこと（係、委員会、家庭学習、身支度など）が進んでできる。

2学期 児童：91.7% 保護者：65.9%

児童、保護者を対象とした学校生活アンケートでは、今年度7月と12月、また昨年度の12月と本年度12月を比較してみると、数値の増減はあるものの、項目による傾向に変化は見られなかった。

児童のアンケートでは、項目による違いはあるが、おおむね肯定的回答が9割程度であり、学校生活に前向きに取り組んでいると感じる。

保護者アンケートでは、匿名アンケートのため学年による傾向はつかめないが、児童が主語の項目と学校が主語の項目に分けてみると、児童に対する評価の方が低い傾向にある。学校教育に対しては、高い評価であるが、著しく評価が低い項目や児童との差が大きい項目が見られる。

アンケート項目の「家庭での生活習慣」に関する「早寝早起き朝ご飯」や「家庭での宿題や身支度」の結果では、児童が「できている」と評価していても、保護者は「できていない」と受け止めている傾向が大きい。

<考察>

学校教育活動では、新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、行事や活動、校外学習などを進めることができた。今後もこれまで同様に、方針や基準に基づき、現状をふまえながら、児童が安心して、安全に学校生活を送ることができるように、対策を工夫し実践し続ける必要がある。

新型コロナウイルス感染症対策の緩和を受け、コロナ禍において、廃止、縮小してきた学校行事や活動の検討、再開を望む意見がアンケートでも見られた。

今後も、たよりやブログを定期的に発信することで、児童の頑張りを伝えていけるようにしたい。

保護者との連携は、定期的な教育相談の実施や日常的な連絡を進め、状況に応じてオンラインの活用やWEBでの配信をしながら、連絡、情報交換に努めていきたい。

児童に関する課題の原因の一つとされるメディアへの関わり方については、情報モラル教育を計画的に進めるとともに、家庭への啓発を随時発信していきたい。また、放課後や家庭での生活習慣の向上・改善のため、家庭への啓発も、内容、時期を考慮して進めていきたい。

コロナ禍や体調不良による教職員欠勤やいじめへの対応などには、組織的対応を心掛けてきた。今後も、多種多様な教育課題に対して、組織的に対応し迅速かつ丁寧に取り組んでいきたい。

学習や学校業務についても、ICTの有効的な活用や支援員、学校ボランティアの協力を得ながら、効率化、負担軽減を目指した教育課程編成を目指していきたい。

<改善点>

次年度も、定期的なたよりの発行、HP、ブログでの情報発信に努めていきたい。他の配付物についても、さくら連絡網を活用してのWEB配信を広げていきたいと考える。

保護者への連絡については、計画的に進め、伝達、記述方法を見直し、保護者の視点に立ち、より分かりやすくしていきたい。

児童に関する課題の原因の一つとされるメディアへの関わり方については、情報モラル教育を計画的に進めるとともに、家庭への啓発を随時発信していきたい。

次年度より、いじめ対策といった教育課題に対応し、児童と向き合う時間を確保できるよう、成績二期制を採用する。このことにより、1・2学期末の短縮日課を減らすことで、授業や児童に関わる時間を確保し、授業の充実や児童の見取り、いじめ未然防止に努めていきたい。また、保護者に対する相談の機会を定期的に設定していきたい。

本年度から、知的発達支援学級「ひまわり学級」が新設され、現在11名が在籍している。個々の特性に違いはあるものの、異学年混在の学級の中で、元気に学校生活を過ごし、成長の様子が見られる。保護者、地域へ発達支援教育への理解が深まり、支援が広がるような態勢づくりにも、取り組んでいきたい。

新型コロナウイルスに対する認識の変化や感染予防に対する緩和策が進む中で、これまで感染症予防の観点から中止、変更してきた学校行事や活動、イベントについて、今後の状況をふまえながら、再検討をしていく必要がある。

教育課程編成については、今日の教育課題をふまえながら、働き方改革の視点を持ち、学校業務の効率化を目指し教育課程編成を行っていきたい。

今後も、より一層、保護者、地域との連携を深め、教育活動、教育環境の改善・充実に努めていきたい。



【 修学旅行 】



【 和太鼓部 発表会 】

学校関係者評価

学校関係者評価は、1月12日（水）に行われた学校運営協議会の際に、運営協議会委員の皆様により実施しました。

各担当教諭から今年度の本校の取り組みや児童、保護者を対象とした学校生活アンケートの結果を説明、報告し、学運営協議会委員の理解を得られました。特に、コロナ禍における児童や保護者、地域への関りについての御意見を多くいただきました。それに対する学校や学級担任の取り組みへは、一定の評価を得られました。

次年度に向けては、「目標をしっかりと見定めて、知・徳・体の部の提案にあったように、子供たちの成長のため、頑張っ取り組んでほしい。」との御意見や引き続き学習ボランティアなど学校教育活動への御協力の提案をいただきました。

以下に、各部にいただいた御意見を掲載します。

【「知」知育向上プランについて】

- 授業の始めに、身につけたい力をキャリアプレートで視覚的にも明確化することで、何を目的として、授業を進めていくのか、「どうしてこれをやるのか」が子供たちにも分かりやすくして良い。
- 以前参観した時よりも子供たちのタブレットの活用技術はとても上達していた。ICTについては、教員の教育、研修にも力を入れていただきたい。

【「徳」知育向上プランについて】

- 校内で日常的に会う人への挨拶はできていると思うが、下校の際の近所の方等、顔見知りではない人への挨拶もできると良いと思う。挨拶は、子供たちに強制するものではないとも感じるので、地域としても、回覧板で呼びかける等の取り組みで、コミュニケーションが取れる町づくりをして、子供たちに手本を示していきたい。
- 大人同士でも挨拶をしない人は多いので、それが子供に影響をあたえているのではないかと心配になる。
- 最近は、家に帰ってから近所の他学年の子供と遊ぶ機会が少ない。また、一人っ子世帯が増えている中で、縦割り活動、異学年交流をする事は、子供が子供から学ぶという貴重な経験ができるので、これからも大切にしていきたい。
- 低学年の教室に学級担任とは別にもう一人常時フリーの先生がいて、見守ってくれると良い。何か困った時、相談相手になれる大人が近くにいる環境ができると良いと思う。

【「体」体育・安全向上プランについて】

- コロナ禍で子供たちの体力の低下が心配されるが、学校として様々な取り組みをしていただいていると感じた。運動場にドッジボールコートのあるだけで、子供たちはそれを楽しむので、これからも取り組みを続けて欲しいと思う。

【 学習ボランティアについて 】

- 本年度は、年間を通して活動しているボランティア（読み聞かせ、図書館、ガーデン）に加え、2学期は、家庭科「ミシン補助」のボランティアを実施した。3学期には、生活科「昔遊び」、社会科「戦争についての話」を実施予定である。

次年度も、学校の要請に応じて、「校外学習の引率」、「給食の配膳補助」等のボランティア募集の呼びかけをしていきたい。